

書評

遠藤ゆり子著

『戦国時代の南奥羽社会』

—大崎・伊達・最上氏—

(吉川弘文館、二〇一六年)

遠藤 啓之

一

近年、『講座 東北の歴史』シリーズ(入間田宣夫編、全六巻、清文堂出版、二〇一二～二〇一四)や『東北の中世史』シリーズ(柳原敏昭他編、全五巻、吉川弘文館、二〇一五～二〇一六)などの刊行に見られるように、東北をめぐる歴史研究は活況を呈している。本書は、活気を見せる東北中世史研究をリードしてきた著者によるものである。まずは本書の構成について示しておきたい(括弧内は初出年)。

序章 本書の視角と概要(新稿)

第Ⅰ部 南奥羽の大名権力

第一章 大崎氏の歴史的性格(二〇〇二年)

第二章 大崎氏の権力構造(二〇〇一年)

第三章 大崎氏「天文の乱」の一考察(二〇〇九年)

第Ⅱ部 戦国大名間の外交

第一章 執事の機能からみた大崎氏(二〇〇一年)

第二章 奥羽の戦争と伊達政宗の母(二〇〇三年)

第三章 慶長五年の最上氏にみる大名の合力と村町
(二〇〇四年)

第Ⅲ部 南奥羽の地域社会

第一章 公権の形成と国郡・探題職

—最上・伊達両氏の事例から—(二〇〇二年)

第二章 「塵芥集」用水規定を通してみる戦国大名

(二〇〇八年)

第三章 戦国大名蘆名氏の成立と山野境目相論(新稿)

付論 奥羽仕置の一考察

—小林清治『奥羽仕置と豊臣政権』・『奥羽仕置の構造

—破城・刀狩・検地』によせて—(二〇〇五年)

二

序章では本書の視角と概要について取り上げ、取り組む課題についてまとめている。著者は本書の目的として「南奥羽地方を主なフィールドとして、戦国大名の領国支配のあり方と大名間外交を分析することによって、戦国時代における南奥羽社会の特色および戦国社会の歴史的性情を明らかに」することであるとする。そしてそのために六つの課題を設定している。①中近世の大名権力がもつ領域的性情がどのように形成されたのかについて、戦争・和睦を繰り返す戦国社会を動態的にみることによって、その過程を追究すること。②戦国大名同士の外交交渉について検討を加えることによって、大名家がどのようにして領国の平和と秩序の維持を達成することができたのか究明すること。③戦国大名の歴史的性情を検討する上で不可避な問題である、戦国大名が守護職・探題職をもつ意義について、外交面から明らかにすること。④戦国大名論に不可欠な基礎作業として、戦国大名の家中・一門の分析を進め、権力構造を究明すること。⑤有力戦国大名を中核とする「惣『国家』」が形成されていく過程とその動向の実態を、南奥羽を事例として考察すること。⑥近年の村落論を踏まえた、南奥羽社会における大名権力の社会的機能の実態究明に取り組む

こと。以上の六点である。

序章で挙げられたこれらの課題について、本書では「南奥羽の大名権力」、「戦国大名間の外交」、「南奥羽の地域社会」と題された三部から検討が進められている。内容としては本書副題にもあるように、大崎氏・伊達氏・最上氏の三氏に焦点が当てられたものが多い。次に、以下第一部第一章から各章ごとに内容をまとめておく。

第一部第一章では、戦国期地域権力としての大崎氏の、その歴史的性情について論じている。戦国期の大崎氏は、周辺諸氏の求めに応じて介入した紛争において、期待された紛争解決能力を発揮できず、代わって伊達氏にその役割が求められるようになっていた。また、大崎氏の内訌においても、大崎氏は自力で解決することができず、伊達氏に合力を求めている。これは、国人伊達氏が戦国大名へ、奥州探題大崎氏が伊達氏に依拠する地域権力へ変質していったことを示す、と著者は指摘する。また、大崎氏の紛争介入は他氏の求めに応じて初めてなされることから、職権的支配を前提とした「衰退」した探題ではなく、現実的平和維持機能に基づいた戦国期的地域権力であるとした。一方、地域権力に変質した大崎氏が戦国期も自立した権力として存続し得たのは、大崎氏が時々の政治状況に応じて伊達氏・最上氏など、従属すべき戦国大名を主体的に選択していた

ような氏家氏の野望、恣意性は確認できず、あくまで大崎「家」の平和維持の問題であつたと評価している。そして、大崎氏という地域権力が、執事氏家氏という地域権力と結びつくことで平和維持機能を果たしていた点に注目し、地域権力間の恒常的結びつきが不可欠であつたことを論じた。

第二章は同じく「大崎合戦」を事例に、伊達氏と最上氏の和睦における保春院の役割を追究している。保春院は最上義光の妹で伊達政宗の母である。「大崎合戦」において、伊達氏は氏家方に合力したが、黒川晴氏が大崎方について、ことで苦戦し、泉田重光らを人質とすることを条件に撤退する。こうした状況下で義光の内々の打診を受け、保春院の和睦交渉が開始される。これは政宗の意向を受けたものでもあつた。保春院は伊達氏・最上氏双方から仲介者として期待されており、また保春院自身もそれを自覚していた。著者は、義光と保春院の兄妹に内々の外交ルートが維持されてきたことが重要であつたとし、婚姻関係と他家に入つた女性が果たした役割を見出せるとした。また、保春院を介した和睦交渉においては、「伊達政宗―保春院―最上義光―大崎義隆」という経路が形成されており、保春院は伊達・最上氏間をつなぐ回路の役割を果たしていた。さらに、大崎氏が最上氏を頼んだ理由の一つとして、保春院を介し

た伊達氏とのつながりを期待したためとしており、保春院が当事者間のみならず、その「家」を頼む存在も含めた交渉可能性としての回路を創り出していたことを明らかにした。

第三章でも保春院に注目している。ここでは慶長五（一六〇〇）年の最上氏と上杉氏の間の争いにおいて、実家最上氏の危機に際して保春院が果たした役割と、それが村町の人々にどのように影響したかについて検討している。この戦いに際しては伊達氏から伊達（留守）政景が、合力として派遣された。しかし、政景の動きは低調だった。そこに繰り返し合力要請をしたのが保春院や保春院侍女小宰相であつた。保春院や小宰相はやや脅迫めいた言葉を交えるなど、取次のような公的な関係では難しい要求などを通して、伊達氏の合力を引き出し、維持していた。政景は政宗の叔父であり、保春院や小宰相とも良好な関係を築いており、ここでは兄妹・母子のような関係だけにとどまらない、婚姻が創り出す「縁」の広がりがあつたことが明らかにされている。また、合力による最上軍の勢いの復調は、最上氏に味方するという選択肢を村町に与えた。これにより、最上氏に味方することで村町の平和維持を図ろうとする百姓たちの働きによって、上杉氏は撤退していく。著者は、領国内にある村町の平和維持を求める動向が、最上家

の存続をも規定したものと位置づけた。

第三部第一章では、最上・伊達両氏の事例をもとに、公権成立の問題を論じた。ここで著者は「国」「国中之儀」「侍道之筋目」「探題」というキーワードに注目している。出羽において、「国」観念は天正一一（一五八三）年以降、越後国の上杉氏に対抗する上で持ち出され、さらに最上義光によって「国中之儀」という概念が創り出された。これは、ともに出羽国への所属意識を持つ、最上氏と最上氏を頼む者たちの相互関係の中で創出された論理であった。「侍道之筋目」は伊達氏と最上氏によって多用された表現で、従属や和睦の承認といった平和の創出・維持の際に用いられた。「国中之儀」「侍道之筋目」からは、最上・伊達両氏という周辺地域権力を統合した公権の形成過程をみることができる。著者は戦争停止を求める社会動向が最上氏・伊達氏という新たな公権を生み出していたとした。「探題」も豊臣政権の惣無事令との接触以降に現れてくる表現であり、豊臣政権に対抗する上で必要とされた概念であった。そして、最上・伊達両氏がそれぞれ出羽・陸奥探題職に基づいて支配を正当化していたとする見解は妥当ではない、と指摘した。

第二章では飲料水について定めた「塵芥集」八七条に注目して、近世の事例も参考にしながら、分国法制定の

意義、戦国大名の歴史的 성격について論じている。「塵芥集」八七条は、万人の飲み水として利用しているところに汚らわしいものを流すこと、一人が流れを堰き止めて川下の人々を飲み水に飢えさせた者は罪科に処すことを規定している。著者は条文から、当時伊達領国で発生していた在地の問題について想定する。町場では川だけでなく用水も飲み水に利用する場合があり、灌漑用水との兼用である場合もあった。そのため、村町は時に対立し、時に融通し合う関係を創り出していたとする。また、飲料用と見なされていた用水川へは「穢しき物」を流し「不浄」を行うべきではないと認識されていた。しかし、そのような行為がなされる場合があり、問題化していたことが想定される。すなわち、八七条はそのような用水秩序の崩壊、干魃による水不足など生存が危ぶまれる事態に対処した条文である可能性がある。このような問題に際して、「郷」「村」は対立し、時には伊達家中の者が呼び出される場合もあった。伊達氏はこうした紛争を抑止し、人々の生存を保障する必要があったとし、「郷」「村」のような存在こそが、伊達氏を「塵芥集」の制定までに至らせた真の主体として理解できると論じた。

第三章では山野境目相論の分析を通して戦国大名蘆名氏の成立について論じている。戦国期の蘆名氏は、境目相論

に対しても大名法廷の場を開放し、領内の秩序維持を図っていた。塔寺に対する新規の軍役のような新しい権限は、領国内で蘆名氏が果たした役割に対する対価であった。また、先例に従った中人裁定によって決着を図る場合もあり、そうした中人裁定では、富田氏や松本氏といった重臣を含む蘆名家臣が中人を務める事例があったほか、時には一門・家臣の連署に蘆名家当主が花押を据えて裁決を行う場合もあった。村落間の対立は領主間の相論へと転化するこゝとがあり、相論の行方によっては一方が伊達氏など他氏と結びつくことも考えられた。そのため、問題がエスカレートすることを抑止するため、蘆名家中が中人として解決にあたったものと指摘している。また、災害・飢饉といった危機のなかで、村町は領主と結びつき存続を図り、領主は重臣、蘆名家当主を頼った。蘆名氏が重臣を中心に戦国大名化していく背景には、こうした村町の動向があったと論じている。

三

以上のような本書の内容をふまえて、本書の成果を挙げる。まず、「講談調」の歴史観も含む、従来の奥羽の歴史像を取り払った、当該期の実像を描き出したことが挙げら

れる。衰退した奥州探題大崎氏、探題職に基づく伊達・最上両氏の支配、そのようないまだ根強く残る、奥羽の戦国期権力をめぐるイメージを取り払い、いち戦国期権力へと変質していく大崎氏や現実的平和維持機能に基づいた新しい公権としての伊達・最上両氏の姿を、史料から実証的に提示した点は重要であろう。

次に、頼む者、頼まれる者たちの関係性に注目した研究視角を重視する点である。これは、大名と従属国衆の双務的關係を明らかにする近年の国衆論の成果を奥羽に援用しただけにとどまらない。地域権力と大名のような領主間の関係だけでなく、兄妹・母子や他家に入った女性と当主側近のような個人的関係、日常的なつきあいから生まれる「御縁近之好」のような地縁血縁の關係、そして自己の存続を図るため領主と結びつく村町の姿など、あらゆる階層に視点を当てた検討がなされており、大きな成果といえる。特に、この視角によって、支配の客体としてではなく、歴史の主体としての村町の姿を明らかにした点は、戦国期奥羽の研究上重要な指摘であると思われる。

最後に、大崎氏についての基礎的考察を示した点である。基礎的考察は華やかさこそないものの、研究蓄積の少ない奥羽の領主権力研究にとって重要な論考であると言える。乏しい一次史料、錯綜する系図、虚実入り交じる後世の記

録、そのようなものを整理し、歴史的事実を明らかにする作業は大変な苦勞だったと思われる。しかし、こうした作業は著者自身の研究のみならず、今後研究を志す者たちにとっても非常に有用なものであり、大きな成果と言えるのではないだろうか。

ここまで、本書における成果を確認してきた。次に簡単ながら、今後さらなる深化が望まれる点と気になった点について提示しておきたい。まず深化が望まれる点として挙げられるのは、頼み、頼まれる関係と南奥における「中人制」との関係である。南奥（特に現在の福島県域）では、中小規模の領主間による紛争が続き、その際周辺の領主が「中人」として紛争調停にあたる事例が多くあった。この事例では、伊達氏・蘆名氏・佐竹氏といった比較的大身の領主が関わる事例もあるが、同規模の領主が立場を変えながら紛争調停にあたる事例も多く残っている。こうした「中人」を介した紛争調停事例は、著者が示した頼み、頼まれる関係から生まれる現実的平和維持機能という観点からみるとどのように評価できるのか。

もう一点は、本書第三章で示された「無縁」性の問題である。これまた「中人制」の話になるが、時に隠居した前当主が紛争調停にあたる事例がみられる。もちろん、後継者への権力委譲をスムーズに行うため、二重権力体制が敷

かれている場合もあり、隠居した前当主が「無縁」的存在であるとは一概に言いがたい面もある。しかし、隠居した前当主がどのような役割を果たし得る存在だったのかという点は、本書で示された論点と関連させることで、より深めることができる論点になり得ると考える。

最後に気になった点を一つあげたい。それは史料上の文字の使い方である。たとえば〈頼む〉という言葉であるが、第Ⅱ部第一章では史料上の文字を用いて〈憑〉む〉と表記されているのに対し、他の論考では〈頼む〉と表記されている。もちろんこれは、著者のより忠実に史料に向き合おうとする、誠実な研究姿勢の表れであることは言うまでもない。事実、この姿勢は論考単位では徹底されており、表記揺れのような矛盾は見受けられない。しかし、こうして一冊の著書としてみると、一抹のわかりにくさを生み出してしまふ。果たして〈頼む〉と〈憑〉む〉にはニュアンスの違いはあるのか。魅力的な論点を数多く提示している本書であるだけに、こうしたわかりにくさが生まれてしまふのは残念なことである。つまらない指摘かもしれないが、念のため記しておきたい。

四

以上、評者の力不足から、雑駁な要約、つまらない指摘に終始してしまった。著者の意図から大きく外れる内容になってしまったことをまずはお詫びしたい。著者のご海容を願う次第である。はじめに述べたように、東北をめぐる歴史研究は大きく進展している。先に示したシリーズ、そして本書の刊行により、東北の中世史研究は到達点が示されたと言って良いだろう。今後の東北の中世をめぐる研究がどのように展開していくのか。著者の今後益々のご活躍と、研究動向の一層の活況を心から祈念したい。

(会津若松市教育委員会)